

## 近年のヨコワ漁況について

長崎県総合水産試験場  
 漁業資源部 海洋資源科

### はじめに

本県では、秋から冬にかけて対馬西岸から五島西沖の海域で、クロマグロの幼魚である「ヨコワ」を曳縄漁業で漁獲しており、この時期の重要魚種となっています。

このヨコワは、6月頃に南西諸島周辺で生まれた0才魚（太平洋発生群）が対馬暖流によって日本海まで北上し、秋～冬に水温の低下とともに南下してきたものが主体と考えられていました。

しかし、近年の漁況をみると、**漁期や銘柄に顕著な変化**がみられます。ここでは、本県の漁獲量の半分以上を占めている対馬海区について、代表的な地区の漁獲状況から近年の特徴とその要因について紹介します。

### ヨコワ漁獲量の推移

本県におけるヨコワの漁獲量は、446～4,805 tと年変動が大きいなか、平成6年以降は高い漁獲水準を示しています。（図1）

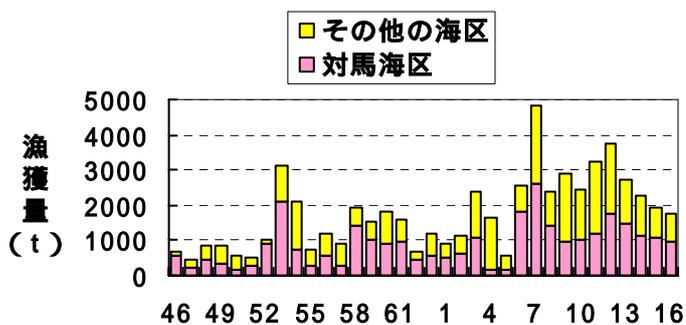


図1 長崎県におけるヨコワ漁獲量  
 (農林水産統計のその他のまぐろ類)

### 漁期の変化

対馬の代表的な地区の漁獲量を1～3月期、4～8月期、9～10月期および11～12月期の4期に分けて、漁期の変化をみると、近年は1～3月期や4～8月期の漁獲割合が増加し、9～10月期の漁獲割合が極端に少なくなっており、**主漁期が秋期から冬～春期へ移行**していることが分かります。（図2）

### 漁況の変化と水温との関連

9～10月期の漁獲割合と10月の水温、及び4～8月期の漁獲割合と3月の水温を経年的にみると、水温の高め傾向に伴い、主漁期が秋期から冬～春期へ移行したことが分かります。近年の日本海の水温も高め傾向にあり、秋～冬期の日本海からの南下回遊が遅れるとともに、南下し越冬後は、再び日本海側へ回遊する群と太平洋側へ回遊する群とに分かれる中で、**日本海への回遊群が増加**したのは、冬季の水温上昇により越冬場が北に広がったためと推察されます。（図3）

### 銘柄組成の変化

同地区では、豆（1kg未満）、小（1～2kg）、中（2～3kg）、大（3～4kg）、特大（4kg以上）などの銘柄に区分されていますが、この銘柄別漁獲割合の推移をみると、**近年は銘柄「中」や「小」など小型銘柄の割合が増加**しています。従来から日本海もクロマグロの産卵場となっていると考えられており、日本海の水温が上昇したことが、

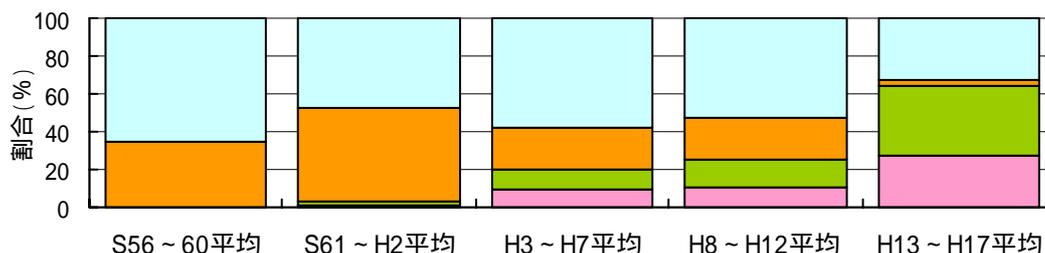


図2 対馬代表地区における漁期別漁獲割合の推移

■ 1-3月期 ■ 4-8月期 ■ 9-10月期 □ 11-12月期

産卵や成育の場としてより適した環境となり、日本海発生群が増加し、また、日本海発生群は従来の主群である太平洋発生群に比べ生まれる時期が遅いことから、小型銘柄の増加につながったと考えられます。(図4)

今年の太平洋生まれ群や日本海生まれ群の資源水準  
 対馬暖流の勢力  
 漁期中の表面水温  
 対馬西水道の海況

**最後に**

水産試験場では、平成元年以降毎年9~10月に、対馬海区ヨコワ漁況予報を発表していますが、前述の漁況の変化を考慮し、平成14年に予測手法を見直し、現在は、次のような根拠を基に予測を行っています。

なお、今年度の予報については、9月末を予定しております。

(担当 山本憲一)

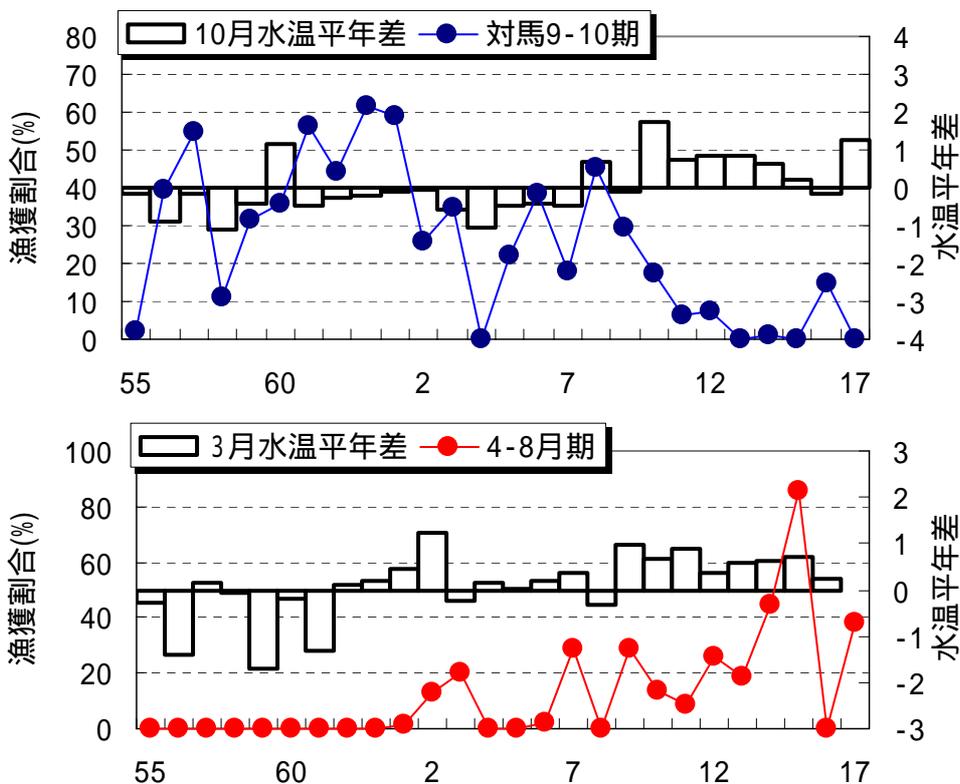


図3 対馬代表地区における漁期別漁獲割合と水温の関係  
 上図：9-10月期と10月水温の関係 下図：4-8月期と3月水温の関係

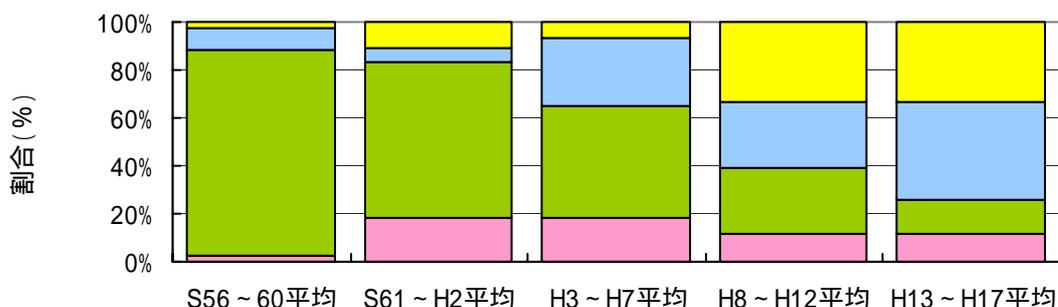


図4 対馬代表地区における銘柄別漁獲割合の推移

豆はほとんど無いため省略